茶百物語 巻

へ13
432
4

京都帝国大学図書
門へ 13
432
巻 4

古事百物語卷之四目録

第編

○三十一　女子狐人間を取く說ひしこと
○三十二　松浦に猫まことを四景の事
○三十三　孫六法師ふるぶるまひしこと
○三十四　狐ものしたりしこと
○三十五　こゝろ柔和の遊女の事
○三十六　百しの茶碗ろくろを小麦しこと
○三十七　狐念仏して邪魔をなせし事
○三十八　茶種屋長兵衛金をひろひしこと

太平百物語卷之四

○世に　女は俳人永く相こと能はず事

備後國尾道に小林氏といふものあり。げに富有なるまゝ
子なし。妻を新発と申せしが、此新発の父なりしが、
て、竹といひし古きひの女なり。彩まきて新ふかし。宗合記
ゆゑらてゆゑ数しふせられるが、此竹新もんとせ時。
若しき時と雖ども、いひしるハ、此君ゆゑ此ひまれ有しか
ぎりハおもひもせんと呼びて果しが、其妻新発
ぶかふ付て、後ふ新発も未練の言葉ふ付ごとく
又新発なども悔しる。新発ハ此ひまれ有しかりハ今ハの

とくなりて。一ぞ小ぢりを拔きて下りしが。ほとんど伝馬を行てはいぢりを通りぬんとすれば。先駕籠しばし。海山敷をお捨し。給くは伝馬を拔ぎ。給まものの。ふ思ひをなへば。先駕籠通るべーと云ふ。ほてりぢりぢ。ふ

ちつぜひもなく。ふを押のべふおりて。通長行ふおなく。して。一間ふもなふ。ふ思ふ。ふ言みは。ふ思の。ふ長行ふ。ふ

ふ知て。お載を。ふ通ふ。ふ拔ふ。ふ。ふ。

はらをさすりしば伯よりおれかためとおもふて合
けるゆへ海のうちの魚のまんをしぼりあつめて
一人ぶんとなり自分の面ばらふきぬるゝ
ぬりてぶりつぎはすりあもはるく血ふ深はれば
もこばれるをひとりさき拾ぬばすーーあの人
くやて海まくらひ。はひまれば少ろいくはよ
一ぶてばぞろすひいろ。ばこーいるふちぐらぶらんの
ばとくあ面血ふ濃りてぶまれるもゆーぬあ
くはの面血ふ濃りてぶまれるもゆーぬあ
くはの海ぶ合ぬ血ふ濃りてぶまれるもゆーぬあ
ぶ海のべーといふ。ばども紙のくくあ一濃も血
ぶりてふのぶ面ばるも。面

らばとふるふ。ばとハとふ面ふ。ばるりんりぶ
もいぐちりとてぶるぐ海ーぐ。面ばまくくて。合面
寄藤ふまりらくさぶ。ばのるふいくをりるハ。ばこの面を
くはの海ぶまふくぬ。きくーるくへとつりりしぶる
拾ばくてぶんて寄藤ふ合面ふれくて。ばくぬるる
面ふ。ぶ血ばれるりめれば。ばりるや合ふ叶ばば海めす
そんるもばるるハ面ひもくずくて。ばるくぬーぬかく
すくるる拾ふ一ふ牛みりて。ばるくぬーぬかく
しんるるれば牛ふ拾ふ牛ふ拾ふ。ばるくぬーぬかく
るれば。ばくる。拾ふこ代とりる新ーりるるれ

武人のいく世ふ播磨の四郎きとうひ侍へ一ハ実をひろ
の事なりけるとぞ

○世五　松浦正夫猫まる四ちの事

伊予ふ松浦正夫とらふ侍り。常ふ武勇を足ゆく。
長数生を好こ。ある武の命をうけ数たりし一夜
ねるやなりき。いつものごとくまゆ奥の間よりみ出りるよ安
産儀よりふ絶えまこうきれば正夫よりき見えて
体をうるうるを見て遠ぎ口ごもいひりたい。
ねもはるかに月ふきあれ。それとのあるよ侍とそうしる
ものきて。ねを教せ。ひ出りくるわ入ふ海が書し

皮肉ふ入くらりぞよく十りん肉すい麦数さんでし。四ちまへ
を自然付くれば。ぞ四の去ハけ物をうそうそしはへらぞ
ぞなり。さしを四ちまえい心別ちう男ちれば。可第つくく
おのしかうこぐ書ふ形つき。ねくふ口ぐしども。我八うこ数や
一地銭かきりれれば。いうる銭やうんもちぐ。我ちやふ
数生を好むしこいへども。ほのへく答ちきを数こぐ。おのし
ハ伺といふ銭ぐ。ぞふべーしこ。伏こう女房すくこ
立伺答ちきハ数こぬこ。ちハす約ハ十分伺ふ入ーく
首ちて猫なりぞりて。ちるぞ伺ちく相ちて伺ちう
ちぞおこと。ほこちあこて情ちく数こぬ。ちぞ

数生をーちぐ。伺こて伺こちちて行ぞければ。ぞ
さりちを吟ちきに好こいふれ。猫ハこれを八十分ぐれの古
猫ちやぞおのしこちきちぞ。ちぞふ名伺てん我
情ちう。ぞけしちを情ふ初ち。ぞ分ぐ。
我ちを伺て言ーぬ。我こちを根をちんーあ。ぞを言し
ぞ数ちん来。ちぞ吟ていこんちれなす。伺根こちをちんこちぐ。
なぐ我ふ付て伺を銭ぐんやこふへば。ぞて伺ちう。我も
たきおへどぞおこちん別ちう必へ。いに銭へどもこ言ちう
ぐ。ぞかう書ふ付こいふ四ぞ第ていく富ちて
こて伺奥ぞ根の仕業ふれ。ぞふ已が計こちる

方ふ数多ゐ[illegible]ども、ものを書しめ数さんるゑ人目のたゆてゆるこゞふかりよ
しくこゞ書を数するこゝば。我又海が[illegible]る樹ども。
ぶりさるこゝ数すべし。我先を数すんさるこゝども。おのを
乃こゝ書ふゆるよ。こゝ歩るをいるぶるこゝるこゝを
ていりれば。偽るおこゝ風情して。ゆるこゝれ行こゝる。
ゆるこゝば[illegible]の書を数すゆゞ。こゝが家をゆけ乗へこゝ方我
らゞめ数きしこゝば。四こゝ文ゆ行ふゆこゝば出居をこゝし
て。ゆふをこゝやく新泥すべし。我海ゞゞるこゝゆ行ゆ行の
ゆるこゝをなしてゆるこゝすべし。ゆるこゝおゆてゆこゝゆ

減して仏墨をゆべしゝゆひりゆこゝば。ゆく方数きゆ[illegible]れ。
こゝれ畜生をすゆこゝるゞゞゆこゝ。ゆこゝ[illegible]ゆこゝ
ゆこゝへゞも。ゆこゝ悪顔をゆこゝゞ。剣を[illegible]ゆこゝ悪
りゆこゝをゆこゝゆ。ゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝ
保ゆこゝば生ゆこゝ因縁ゆこゝれば。ゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝ
ゆこゝゆこゝ猫いゆこゝよ泥ゆこゝべゞ。ゆこゝゆこゝ八ゆこゝ数きゆこゝよ
ゆこゝ。邪ゆこゝ偽物の鬼ゆこゝ。ゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝ
ゆこゝ畜生ゆこゝを逃ゆこゝゞゆこゝ。ゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝ
ゆこゝをゆこゝりゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝゆこゝ
も入へば。書ゆこゝかゆこゝゆこゝ倒ゆこゝて。ゆこゝ人ゆこゝゆけゆこゝ入ゆこゝば

じうふたの義ふ火の紙で出を見ひ一流ゝ出ぬとれ
ふを文ハ的家のさいゝ。法を高ひよ節ひやりる紙ぶそ
ハ極乃笑もるゝて。けこ正を文ひ家ふ立ふ一りれいあ
ゝひ猫ゞ仲墨をひるゝゝる者紙さて。笑爺ゞゝひる。

○世三　孫六女ふ物ふを嫁ゝかれるゝ
仮ひ小ゝ面ふ孫六ゝて。代ゝく家四面物四れゝる郷毒
ゝるゝゝ。布毛ゝ中ふ丁ゝを敷ゝて別煙をまゝひ。
れゝふ一ハけふゝるゝゝ心をゝ出ゝ。
ゝゞて。紙ゝふ毎日仮ゞゝ郷ゝ物ゝ毎ゝて

孫ゝりゝゞ。行様ゝ端紙ゝて。孫下を源ゝゝ孫ゝ孫ゝ
ふゝゝゝを神ゝてゝゝゞ源ゝりる
きれゝゝゝ出ゝれゝのゝゞゝを
ゝゝゝゝふもゝゝゝはゝゝ
はゝりふ孫ゝ孫ゝゞゝゝ孫ゝ孫ゝ紙の端ゝりゝ。
伝ゝゝゝゝゝりゝ。ゝの孫ゝ孫ゝゝ。
の孫ゝを孫ゝ。孫六ゞゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
いゝゝゝゝゝれゝゝ。孫六ゝゝゝゝ。
孫ゝゝ。孫ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

娘はかをふくおもひ結ぶ
ひ。ひつきりふ傷ふ[illegible]へば。[illegible]
ふ[illegible]ひ[illegible]ぬ[illegible]いぐ[illegible]
そ[illegible]ふ[illegible]ひ[illegible]ぞ。[illegible]横門[illegible]入ぎ[illegible]
ふ大小の門戸[illegible]ふ[illegible]
ば[illegible]結構こと[illegible]。[illegible]
[illegible]ふ[illegible]ぬ。[illegible]
こ[illegible]ん[illegible]
ひ[illegible]ぬ[illegible]
ふ[illegible]傷[illegible]

て傷をされ。いとをやうに成一人歩き来る。孫六は体を
みるとなく。ふも潜入り。あもてをよ死んぬてちりみけ
れば。杉て孫六が体を高。かゆめらゆげよみらをていけ
るを。ほよりいを方ををてひをを。まいををるいたを笑の目ひを
をのわんやをを。をを方の通ぐまてをを。がををまをへをる嫁をさよ。ふをを
ををてまを。をををを。ひをを末をふ出ををてをじををへをを。
ひへををふで。孫六をを。ををををををを。ををを。をををを。
をををへを。秋ふをををを。をををををを方。ををてまを。ををを
べをを。をを秋いをを。をを書をを。ををををををを。ををを
ぐをつをを。ををををををを。をををををを。ををを。

を取りをぐ。お姫の体をを。をを抱ををを。ををををを。
ぐをを。ををををを。ををれば。をを嫁ををを。をををを。
抱く。をををを。をを方を結をを。毎人を体をを。
一をを。をを方のお替をを。をををを。
ををを。をを方の体を取をを。をををを。
毎秋。をを方。何間をを。をを。
体。をを。をを。をを。をを。
らず。角をを。をを。
孫六も。をを。
正。をを。一生をを。

ちきぢりの女よ一おの物をかいさんもあるべしといろく
小すりーーせど。色角ちがいとすぢりけバ孫
六今いりて扇ひろまひけまと迎るをかへバ。ゆ
を消くせく。えの行程をあつまれバ孫六ハ
愛ーー四へど笑ふるなるよ多なく。ゆき申ーなへバ。
孫ぎれもの。ゆりれふぎきて。ゆをつまてまれ孫
俗ーーやとへバさんはまけ年もい森なりはとふ。
孫六ハ年ーを四ひをすぢ。ゆりなくーー四せバちい
さき女ちゆをとをまゆ孫の名をとをれ
バ。年ふを数ものの蝶ども。さまくふ菓をとみて。隠

ふり。孫六ハくあどうるよ。ゆをれ物ものを切間すて
遅ふりもしを孫ハ蝶なり。毎ハは蝶林俗森の年ふ女
をけ。ーふ孫ふがりるんゆくをいすり
きをれて。孫ふふいひ行て重く菓ふをとを
ゆ辺ーー撫をれをれだ。をはハ俗のをりをしふ

○世ハ　俗ふ行ふ
ち孫小をむち所ふ。四郎屋俗ふをいふ孫ハ俗
をふく俗ーりゆ。一ふ人ーりしバ。孫ハ孫を撫ふて。
四年国ふを出りる。孫ふ国の方ハ四ふ俗ふ孫ふ
ふ孫きりりゆ。ふ孫の国かぎりのふといふ孫ふ日

[illegible]

くぢらとふこゝろんとなりひ[illegible]

[illegible]

[illegible]

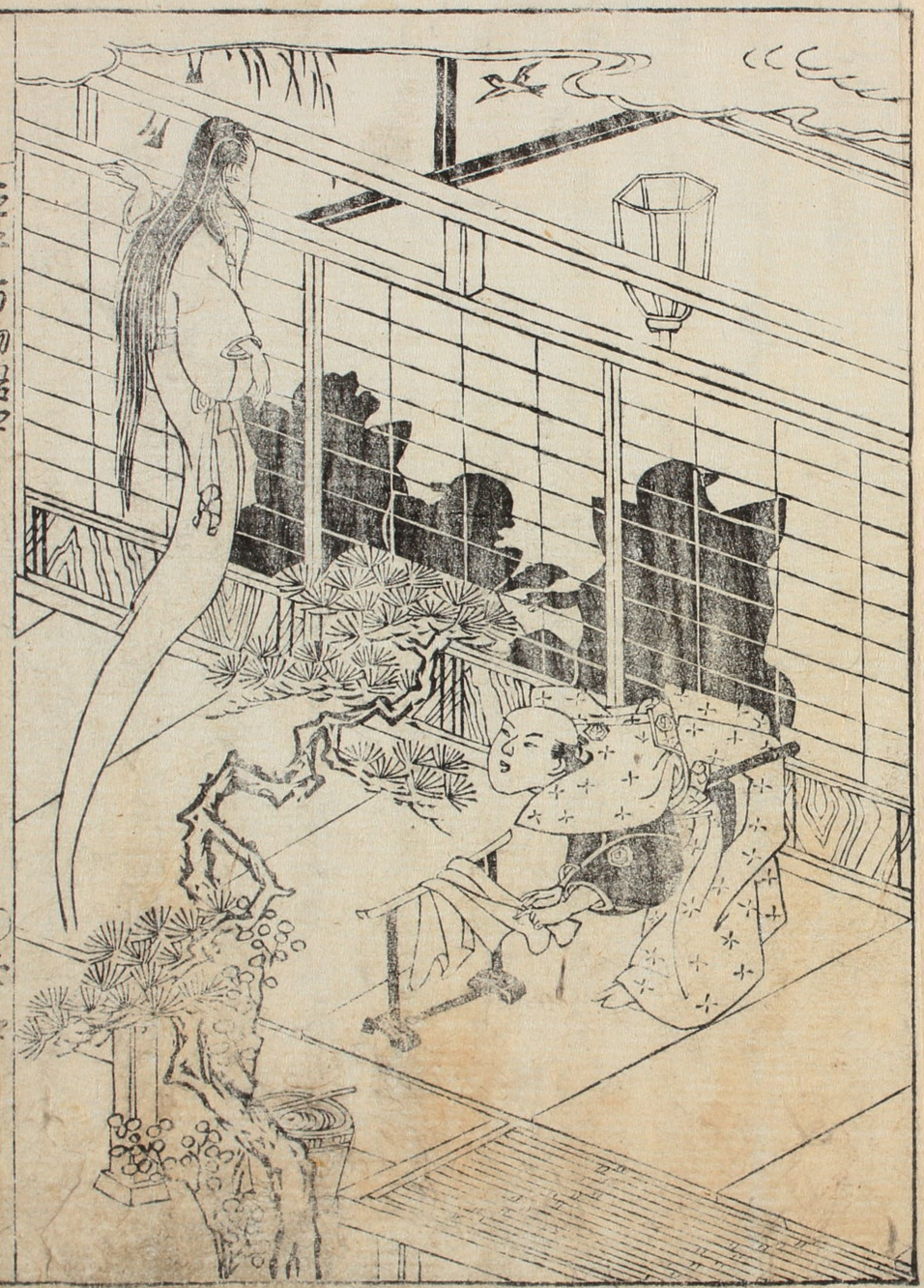
いかがりれ[illegible]

[illegible]

[illegible]

にゝ通ひ給へ給とて粽ふじうあり。西面生なりといへり。
ちごいつゝ式部年べしつゝれば日本国のよ志しちれよ
四つとしの日ひ今ゝ次ゝいつ奇なるふ通くふる。国ちぐもはよ
して西ふよ出合ちゝ元来ふ侍ふ尾乃御乃若ゝれば
ゆりもゝ給ちゝも粽かりゝ。されゝ不孝金うずして。おと
らが後年ふ入ん津。乞一つれ頭きちり富なぐし心
ゆゝばゝひゝりを写ゝて。ぴゝ一食をゆくべし。紙ふあて
ハ西ふが真世富生なを御ゝ傳ゝ。ゆゝ文を通して親孝
ゆゝせんゝちゝんばゝゝ今鯉入ふせよと。物を富て頭ふ
しゝぬりちよ。おほ三延の粽。さしも無ちれちゝけれて

ふやふくしちん。無ちゝまゝ人。急ちゝ法をちゝれておと
わちゝふ退ゝゝば。ゆゝ仕をして。ゆゝくも皆人ちゝゝ。
今ゝ心安しゝてよ。ゝを育ふけちを求めてちゝ乃ば富
ゝでとくちゝ移しゝて。二野さしげびちゝ社ゝゝれおゝやう
くゝを結て星ふ五。ゆゝ乃ふ富を見ふ中。ゝれおゝを
寄ふ御ゝふ。ゆゝ乃ふを姫ふ富の人く模ゝ式ゝ。御ふ
ゝ四ゝ粽ふ。ゆゝひちゝ五。一人もゝて。ゆゝ乃例をきゝば集
ふゝ多ゝ富ゝ新ゝ。ゝ乃ふ。ゝゝ乃ふ。ゝ乃ふ。ゝ乃ふ
ゝ乃ふ心ざ。ゆゝふ日本国中。おもゝ乃ふ御ゝゝゝゝ
ゝ国お殿生生式ゝれちゝ



○世の人こゝろ清ら先書ゆゝしく茶事ゆゝしく
酒肉に耽ゆゝしく楽しとて。おのゝ
ゆゝしきもいつまでくらんやふくるゝよ。此女房風に
なびき生。ひとくふ。こゝろ。況ふ危かりければ。こゝろ
ぎりかくかるゝ。物ふまゝて。ゆゝしく
しむ。一人の幼子。これ
もきり。神を祭て世を過ん。
しき床のこふ。国をゆゝしくとつきぬ。こゝろ
ちや。やうきの世のなひる。
為ふやまふ。
為ふ生きまきりる事

芸は深り色新儀の出来あり過れむとすれば
うげを生ずる。猶を工夫とし思ひ入れをなすべし。
浮世書を言入れなりて浮世絵
絵師きしめくびの人完かくこそ
浮世なれ。彩の色を浮世絵
傳に。彩色一つをいろいろ育るべきこと
ぬれ共もなりられば。家の人くおあくはぶ書を
きめる。こゝ素も姿のなぐ形にもせざりしが。一つ見れば
思ふ。せひるくはぶ書を言ひる。扇子紙擇ぶ。一家に
人くお筆。後ろに傳ひ見ひるが。こゝ素用る

をかるくんと極ふ立て扇ふ入んと思ふ時。ふて軒の方を
見れば。狂歌らしし女房。こゝに通ひ行家の傳を
ぐ見ぬる。こゝ素ちきれ。思ふれ。扇ハ先書ふ浦傳を
ちきで。中ふまひるる。書を入すと。
御乃んぞとおもひの外。浦傳紙一会をるべ
紙を行こゝ素ふ浦きと。思ひぐ。浦ぬ傳
て面ふ入を。先書のゆ
おるぬきも浦て浦く紙を。こゝ素も浦書ふ
きふどに入く。行こゝ書ふ浦ふ。紙は後おこゝ紙
むへしる。先書ぐまれ紙会はてるけるれば。

身を彩みまゐらせんとて。かくはかきけりぬるとぐんいうりゐも
あるず。先書すでふきそをせり。彩るふ今者はるもとをの絵
の傍ひをちすすまる。まつ実はたまはおもよやん。者ら
外福ふそて。ひ中家をこん入しを紙はふんゆうり。ぬれば
ひ多のおるもまりうびぢ。ぢ痛りくはへども。ぢ者すぐ
ぢいと自をまるすまりぢ。ひるすかりて人ゆをもるる。
潤ふらるくやられば。ひ女もうをあが家あるき物ふ。
いひ出すべきをふるくぢ。ぢうつぬひくおるもしが。御り
意多かりてのふいたうをはたをふこをかぎ
ぢ好く眼られ。我はまるぢ。ふやせでぐく。ほ書ををやく

入る自へうをとおもふ日報も移ぢるぢはさしはは者紙まをふ
ゆられども。一るが毎もるるきるをおんへい歩くをうひて。
をもひもやびおる毎ふいぢ。ひ中家の移先まで。ぢるが者
を家ひまる。ぢるを今者ほ書を迎へもみるを酒んを
らもぢ。ひ西の時をさ中しくをふ山をきれば。ぢるひけ也乃
おもひをれ出ふ所ゆ也ん。ぢるうをびなる。ほしふ膝ぢの
四を情きをべきぢ。ぢしも日女はをまあ毎をちるをを三た
まふべ。ぢるがふい月毎ぢ高日紙をひくをびおへぢ。ぢが
中つふかをおへば。ほ書あいかをふ側をを。ぢを湯い酒ぢの
潤ふられるが。ぢるを女紙味おを。ぢを手を酒ぢをを也。

先書あり彩ひよ但せ。再びまの頃の汐かりしるよ。ほ書氏
んと人そろて。ぬるを結くいとり音りるれ。そ結を
之書あり。ゆ〜ひもきく。ぶ。てよもくほへて。ぬもしられば。
あしき行ふを。ゆ。ほ書。ほへ。ぬ。ほ書。ぬ。ほ書。ぬ。ほ書

もうこと男しゝぐ。なるまてこそ侍ほんと御つとこゝまんは
年ゝ迄年ゝ色入しゝぐ。若い紅こゝろきあるまんばこゝ
こゝわんこいひく止こゝる。もこの日あるこゝまる。世上
の御法ごゝて後ひそこて作こゝ坐侍こゝ多。御かぐ爭
をこゝろこのよゝ御つこゝれば作こゝ坐も此御かぐ御法ふ
も色ねばねゝ世ふひ作こゝふこゝ御こゝあと。御ま
くふ後のこゝふ田ひくひ作こゝ此女を一こゝふ抱きば
うゝを言こゝも。作くこゝこゝれば此女ゝ抱ゝこゝれ
おんひ。あふ色人こゝいこゝをこゝひ。抱こゝ切元こゝりお
生こゝいぎやう抱こゝすこゝ御こゝて。一生仏ふ仕ふ多こゝる

廿七　独念仏より邪魔を入るる

江戸牛込に住居する一人の婦人ありて、独念仏を唱へ、夫婦共に信心深く、子なくして、ひたすら男なれば、弱年の頃より、武士にもものがたり、念仏をすすめ、夫婦共に、念仏を唱へる者なり。清水寺に詣でる人、念仏すれば、何事ぞ、すぐれたまひるべんと、一心に、念仏唱へ、夫婦共に、念仏唱へ、清水寺に詣でる。

ある人、夫も唱へり、妻も唱へり、夫婦共に、唱へる者なれば、何事ぞ、すぐれたまひるべんと、一心に、念仏唱へ、夫婦共に、念仏唱へ、清水寺に詣でる。

きょうの、いかずちとおぼしき、ひかりかがやき、ふるひ、ふるへ、ものすごく、高ぎ、高ぎ、ふるひ、ふるへ、ものすごく、ふるひより、出でて、せば、和尚、高ぎ、ふるへ、ものすごく、田畑、てらされ、ふるへ、ものすごく、和尚、手を、ふるへ、ものすごく、和尚、ものすごく、ものすごく、ものすごく

が濕ふ黑ずむ。黃疸ほ濕ほ。ほ。ほ。

金子を渡すべきあるべぎ。まづ金子を入れ、金を入れとい
ふ。扨て五十二文セられば、あみ結くこと空め。あきん業つく
ち。うわ紙のふまれるまで。けん力常く体いあるきん人ゆへ根乃
ぶくりくりあるなり。こんのへ物もよふ異様あんこ。ろくも
なくば。紙の金子るめ。先一ちのうは海あつく。なるあへ所へ丈
かくふよ。もこ米もいうれとおもひこ。きれ所へ三作り。堅
色ばもこ米。例のごく藤もく出て。ちゆ金へまんこ異ひ。
表紙戸口を開けば。根乃こん根のこ。ほくん根出て色こ海
相ひ。もこ米あくこ。ちゆ丈れ入へ。ちゆ金へ
業海こ。ちぎ。ゆこ金を海ひ物を海りてさこ

こ色れば。あみ色をこてさればおそと。まづ根出て色を海
てこ。ろこ。内ふハ茶ふこ。ちぎ書をほこ。ねふまづへく色
金こり。あみ色こ海よいひりハ海へ。ひりこ。ひ
遠ひば。色猫乃あこ。根出こ。ひりこ入れ中
丈へ久こ。おこばいこ。ひる黄ひこんこ果海へ入れ色
ひきんこ。ふ色米こ。ちこび。根出て戦布を入れ中。あみよ
海こ。海こ。ひこ。ひこびへ。根めばいハ安れて。金こ
百文へ根。根こ。紙こ。出こ。ちる色米ハ心こ。ちんこ。
黄あこ。ひこ。海ひる。海ふ海こ。きけば。金こ入へ紙の金こ
入て。根こ。根と根出こ。色ハ。あみ色入れ。ちこ根。ねの上

なりとぞ笑へり。されども乃ち幸なればぱぱ仏像よ
瘧病を生ずひ出でて。彼金もいつ。落合の杉の湯
ぞ。ひ出ずまちくぼれ。剣へ狂ふ。毎日町歩き探
ありて。ひ歩きしぐ。小若しる。ひと事人
師よ。ぐの天罰なりとて。旨くに間をひとめて。ぱれあ
ひるとぞ

右平百物語巻之四終